

独歩「鹿狩」について

工藤 茂

一
国木田独歩の小説「鹿狩」は、『家庭雑誌』第二卷第一一九号（明治三二年八月一日発行）に発表され、第一文集『武蔵野』に収められた短い作品である。それは、叔父に誘われて鹿狩りに行った十二歳の少年が、たまたま、大きい鹿を鉄砲で仕留めた時の思い出話を、既に成人したその少年が語るといふ内容の小説である。鹿狩りの場所が何処と明示されていないが、小説の中に以下のような表現があつて、この小説が独歩の大分県佐伯における体験をもとにして成立したことを暗示している。

朝日が日向灘から昇つてつゞの字崎の半面は紅霞につま
まれた。茫々たる太平洋の水と連りて水平線上は雲一つ
見えない。又た四国地が波の上に鮮やかに見える。総て
の眺望が高遠、壮大で、且つ優美である。（傍線筆者）

冬ながら（小説における日時は十二月四日）南方温暖
の地方ゆへ、小春日和の日のやうで、うら／＼と照る
日影は人の心も融けさうに、生あたくかに、山にも
枯草雜りの青葉少なからず日の光に映してそよ吹く風に
きらめき、海の波穏やかな色は雲なき大空の色と相映じ
て蒼々茫茫、東は際限なく水天互に交はり、北は四国の
山々手に取るが如く、更に日向地は右に伸びて其南端を
微茫煙浪のうちに抹し去る（傍線筆者）

同時にここには、独歩の愛した佐伯周辺の自然が、見事な
筆致で描写されている。

ところで、この小説のもとをなす体験は、独歩が佐伯にお
いて記した日記の明治二十六年十二月五日（欺かざるの記）
の項に、次のように書き留められている。

二日と三日と四日とは過ぎ去りぬ。

二日は土曜日、三日は日曜日、土曜日の夜―鹿狩りに誘はれ、弟と吾と合して十名、桂港より乗船して猿〇と称する浦前に着き、明くれば日曜日、終日野山に狩り暮らし其夜は猿〇に宿し、四日朝、吾等五名は陸地より徒歩佐伯町に帰る。

しかし、これだけであってそれ以上の詳細な記録はない。後にこの日記と小説「鹿狩」をもとにして、そのモデルを調べた小野茂樹の「若き日の国木田独歩」(昭三四・アポロン社)によると、その登場人物と場所には以下のようなモデルがあったという。

十二歳の少年徳さんを鹿狩りに誘った「中根の叔父さん」というのは、当時佐伯百九銀行の頭取と鶴谷学館の主任を兼ねていた中根祚胤。この人が独歩を狩りに誘った人だろうという。「今井の叔父さん」のモデルは大崎護佑。この人は佐伯藩の御船方をやってきた家柄の人で、当時「合抱社」という旧士族の合資による金融会社に勤務していたという。小説ではこの「今井の叔父さん」の一人息子に、「鉄也さん」という狂人が出て来て「鉄砲腹(鉄砲で自分の腹を撃つこと)をやつて死ぬ。大崎護佑にも貞吉という息子があり、この人がやはり狂人であったという。しかも、独歩が佐伯に滞在中の明治二十七年五月十二日に、「鉄也さん」同様自宅の離れの六畳間で、父の火縄銃を使って自分の腹を撃って死んだとのこと。小野茂樹は「小品「潔の半生」(佐伯時代に関する

る題材を配列した作品)の中に、「狂人あり。其父之を憂ひ、之を悲しみて推く(注一)能はず、彼は如何なる道行を経過して狂気せしか」と書いている「狂人」は、恐らくこの貞吉の事であろうと考えられる。」と、その著に書いている。

また、小説に記された地名については、「かの字港」は「葛港」、「つの字崎」は「鶴見崎」、「さの字浦」は鶴見崎の一角にある「猿戸」、「なの字浦」は「中越」、「うの字峠」は「浦代峠」のことだという。小野は以上のように小説の地名を確定した上で、「鹿狩」の猟場を次のように描いている。

「鶴見崎」は東中浦村にあって、(略)元越山の山脈が蜿蜒と東北にのび、海上に斗出すること四海里、その岬端に当る地点で、遙かに四国の由良崎とも相對する。

「鹿狩」のモデルと地名について以上のように述べた後に、小野茂樹はこの章(注2)を以下のように締めくくっている。

鹿狩りに行ったのは二十六年の十二月だから、まだ護佑の一人貞吉は狂人ながら世に生きていた時であった。独歩はこの鹿狩りで、気狂いの子を抱えながらも明るく善良な護佑という人間に、特別の親しみを感じたようであるが、其の後において知ったであろう貞吉の自殺は、一層の感銘を彼に与えただろうと想われる。

「鹿狩」は、こうした事件も織りこんで今井の叔父さんを中心としてユーモアとペースの交錯した作品である。

右の最後の一文に見られる小野の指摘のように、「鹿狩」は「今井の叔父さんを中心とし」た小説だと思われる。なぜならば、その小説の最後に「人の善い、優しい、そして勇氣のある剛胆な、義理の堅い情深い、そして氣の毒な義父が亡くなってから十三年忌に今年が当る、由て紀念のために少年の時の鹿狩りの物語をしました。」とあって、その「義父」とは「今井の叔父さん」のことなのだから。

さて、これまで小野茂樹著『若き日の国木田独歩』を道標にして、小説「鹿狩」のモデル、地名の実際を見てきた。次節では、この小説がどのような特色を持つものかを分析してみたい。

二

この小説の語り手は、鹿狩り当時十二歳の少年であった「徳さん」である。「徳さん」は前節のおしまいに引用したように、後に義父になった「今井の叔父さん」の十三年忌の紀念に、「少年の時の鹿狩りの物語」を語るのである。この徳さんというのは、一体何者なのであろうか。この謎は先に引用した小野茂樹の著書にも解かれてはいない。おそらく実在の人物ではあるまい。小説「源おじ」の中の源叔父の自裁、

「春の鳥」の中の六歳少年の事故死同様、小説における虚構と思われる。独歩が書くこうと思ったのは、「今井の叔父さん」であった。この人のモデル大崎護佑は、「大柄ではないがよく肥満して好々爺と云った感じ、その当時は五十才くらいだった」（小野前引著）という。その反面その子貞吉は、「幼時から頭の冴えた将来の望みをかけた子供であったのに、少年期から乱気となり、はては家に置いてあった父の猟銃で自殺をとげる」という不幸を担った人でもあった。その人生は若き独歩の同情と文学的共感を引かずには措かなかつたようである。その子が自殺した時、独歩には鹿狩りに同行した時に目撃した彼の姿が、鮮やかに浮かび上がってきたのかもしれない。あるいは、その一見明るく見えながら、その内に暗い影を引きずっていた彼が、徐々に独歩の中において「今井の叔父さん」として形象化したのであろうか。いずれにしろ、このようにして彼は「鹿狩」の中の重要な一人物と化したのであった。と、このように考えて来ると作中の「徳さん」は、独歩の視座の形象化と考えてよさそうである。それでは、その「徳さん」の眼を通して「今井の叔父さん」はどのように描かれているのであろうか。

今井の叔父さんが皆なの中でも一番声が大きい、一番元気がある、一番面白さうである、一番肥満つてゐる、一番年を取つてゐる、僕が一番気に入つてゐる。

これが最初に紹介される「今井の叔父さん」の姿である。「徳さん」を最初に誘ったのは、なぜかこの「今井の叔父さん」ではなく、小説に「人の善い叔父」と表現されている「中根の叔父さん」であった。小説の構成上から考えると「今井の叔父さん」が「徳さん」を鹿狩りに誘う方が、妥当であろう。なぜならば、この小説は「徳さん」の義父、つまり「今井の叔父さん」の「十三年忌」の「記念のために」「徳さん」が「少年の時の鹿狩の物語」を語ったものなのだから。それなのに「中根の叔父さん」が誘うことになっているのは、おそらく、独歩自身の体験がそこにさらけ出されてしまったからに相違ない。それゆえ、一層「徳さん」の視点は独歩のそれに重なるのである。

さて、先程の引用の箇所に戻ろう。「今井の叔父さん」は鹿狩りの一行の中で何でも一番で、ことにも「僕に一番気に入つてゐた」のである。彼は一行の服装を見て「丸で山賊のやうだ！」と太い声で笑いながら怒鳴る。船の中では大概獵の話であつたが、「今井の叔父さん」の話が矢張り一番面白くて、皆を笑わせた。皆が笑わない時でも叔父さんは一人大声で笑つた。このように「徳さん」の目に映る「今井の叔父さん」は、洒落つ氣が有り、豪放磊落で暗いところがない。「君の鉄砲なら一つで外れたら直ぐ後の一つで打つことが出来るが僕のはさう行かないから困る、なァに、中るやつなら一発で中るからなァ」と言う「今井の叔父さん」の会話はいろいろな含みを持つて聞こえる。後に少年の「徳さん」は

この銃で大きな鹿を仕留めることになるし、叔父さんの一人息子の「鉄也さん」は鉄砲腹をやることになる。同時にこの銃が旧式の火繩銃であることを暗示する。この暗示が独歩の体験した大崎護佑の一人息子貞吉の火繩銃による自殺を、それとなく私に想像させてしまう。

このような鉄砲を持って鹿狩りに加わっている「今井の叔父さん」はまた、「徳さん」の、眼には随分のんびりと映る。獵場で昼の弁当に瓢箪の酒で独酌を始めた叔父さんは、弁当を食べ終わると、そこに横になって寝てしまう。この時であつた、大きな鹿が小藪を分けて二人の方に近づいてきたのは。「鹿だ！ 僕はどう為やうかと思つた。」叔父さんを起こすと叔父さんはきつと大きな声を出して鹿を逃がしてしまふ。

そこで「僕（徳さん）」は、叔父さんが小松に立てかけて置いた銃をソツと把つた。鹿が近づいて来る。その次の場面を引用してみよう。

僕の胸はワクワクして来た、何故叔父さんを起こさなかつたかと悔むだが最早遅い。十二の少年が銃を把て子馬程の鹿に差し向けた様は如何に可笑かつた、だらうか。しかし僕は戦慄ふ手に力を入れて搬機を引いた。ズドン音と共に僕自身が後ろに倒れた。叔父さんが飛び起きた。

『何だ、危険ない！ 何したッ？』と掬ふやうにして僕を起こした。僕は其俚小藪のなかに飛び込んだ。そ

して叔父さんも続いて飛び込むだ。

『打たな!』と叔父さんは鹿を一目見て叫んだ。そして何とも形容のしやうの無い妙な笑を眼元に浮べて僕に抱き付いた。そして眼のうちは涙を浮べてゐた。

ここには、十二歳の少年「僕」こと「徳さん」の手柄と、それを知った「今井の叔父さん」の感動が見事に表現されている。そしてここが、この小説のクライマックスである。この場面の後、小説には一行の空隙があつて以下「今井の叔父さん」の人生の暗部が紹介されていく。鹿狩りの帰路「今井の叔父さん」は「僕」の冒険に感動したせいか、「僕」を離そうとしない。そのために「僕」は叔父さんと共に陸を徒歩で帰ることになった。その途中、うの字峠で同行の「判事さん」が黒い鳥を撃ち、「今井の叔父さん」に小声で何事か言いながらそれを渡した。「僕」にはそれが何を意味するのか分らなかつた。

それから二か月程後、「今井の叔父さん」の一人息子の「鉄也さん」が、鉄砲で腹を打って自殺する事件が起こつた。小説はこの「鉄也さん」を以下のように説明する。

鉄也さんというのは今井の叔父さんの独子で、不幸にも四五年前から気が狂つて、乱暴は働かないが全くの廃人であつた。其頃鉄也さんは二十二で、若し満足の人なら叔父さんのためには将来の希望であつた。

叔父さんは狂気の回復するという薬は何でも試みた。うの字峠で「判事さん」が撃つた黒い鳥「岩鳥」も、じつはその薬であつた。しかるに「鉄也さん」の狂気の癒える希望が全く無くなつたが為に、叔父さんは殆ど自棄を起こして酒も飲めば遊獵にも耽る、何処となく自分までが狂気じみた風になつたのであつた。

「鉄也さん」の自殺後「僕」は、叔父さんの顔を見るのが気の毒で、一月ばかりは叔父さんの処に行かなかつた。そしてある日、「僕」は叔父さんの家の養子になることに決まつたのであつた。

三

一節にも引用したが、この小説は次の一文で終わる。

「人の善い優しい、そして勇氣のある剛胆な、義理の堅い情深い、そして気の毒な義父が亡くなつてから十三年忌に今年が当る、由て記念のために少年の時の鹿狩の物語をしました。」つまり、この小説は「僕」こと「徳さん」の、後に「義父」となつた「今井の叔父さん」への鎮魂歌だったのである。

「徳さん」は「今井の叔父さん」が一番気に入つていた。叔父さんは豪放で磊落であつた。その話で皆を笑わせた。明るく振舞つていることで、他人に自分の地獄を見せようとしなかつた。しかし、その人生に「鉄也さん」という暗部を秘め

ていた。そのような叔父さんを「徳さん」は「気の毒」だと同情していた。前述したようにこの叔父さんのモデルはいた。けれども、「徳さん」のモデルはいなかった。とすると、「徳さん」の叔父さんへの感情は、先にも述べたように独歩のモデルへの感情と重層するものと見ていいのではなからうか。

独歩が佐伯時代に材を取って書いた「潔の半生」を読むとそこには「狂人あり。其父之を憂ひ、之を悲しみて措く能はず、」という文があつて、それに対する同情が言外に現れている。その外にも「不幸の家族」「不運の小児」「陋巷の廢人」「一人の乞食」「一人の孤児」へのやみがたい同情が述べられている。そのような彼の感情、性向は「徳さん」のそれとほぼ重なっている。かくして、「徳さん」は独歩の視点の形象化したものであつたと考えられるのである。

(注1) 『国木田独歩全集 第九卷』(昭和四三年・第三刷・学習研究社刊)の「潔の半生」の本文は「之を悲しみて措く能はず」となっている。

(注2) 小野茂樹『若き日の国木田独歩―佐伯時代の研究―』(昭和三四年・アポロン社刊)の「作品編」の「鹿狩」の章

(本学文学部国文学科教授)